

縄文杉

この巨大な古木は世界最古の杉(ヒノキ科スギ属)の木である可能性がある。高さ 25.3 メートル、幹回り 16.4 メートルもあり、かつて縄文杉は別々の 2 本の杉が合わさったものではないかと思われていた。しかし、DNA 鑑定の結果、縄文杉はただ 1 本の木であることが確認された。

樹齢は 2,000 年から 7,200 年と推定されているが、それ以上に正確な年代を特定することはできない。1984 年の炭素年代測定では、少なくとも樹齢 2,170 年 (±110 年) であるという結果が出た。しかし、樹齢の上限はそれほど確かなものではない。木の内部は空洞であるため、年輪年代測定や炭素年代測定のために最も古い層のサンプルを採取することができないのだ。また、幹の幅があまりに広すぎるため、傷つけずに CT スキャンで年輪パターンを解析することもできない。そこで研究者達は、屋久島の他の大杉の成長度合いや、太古の火山活動や気候活動に関する情報から樹齢を絞り込んでいる。近隣の海底火山の噴火によって、屋久島のほとんどの生命は 7,200 年前に死滅しているため、縄文杉がそれよりも古いものとは考えにくい。

縄文杉は変則的な形状のため木材には適さず、そのための過酷な伐採活動のあった江戸時代 (1603~1867 年) も生き残ることができた。伐採された杉の切り株などといったこの辺りで林業が行われていた痕跡は、当時この巨木が島の住民に知られていたことを裏付けている。しかし、いつしかその存在は忘れ去られてしまった。というのも、屋久島在住の岩川貞治によって 1966 年に「再発見」されたからだ。岩川は発見した木を自分の名前にちなんで "大岩杉" と名付けた。翌年、南日

本新聞に一面記事が掲載された。その見出しでは、樹齢を表すのに、縄文時代（紀元前 14,500 年頃～紀元前 300 年頃）にちなんで「縄文」という言葉が使われていた。岩川は 1987 年に亡くなるまでこの木を「大岩杉」と呼び続けたが、「縄文杉」の名前が瞬く間に広まり、現在では正式名称となっている。

1983 年、環境庁が行ったポスターキャンペーンでは、地元の高校生がこの古代樹の幹の横でポーズをとっていた。このポスターが全国の鉄道駅や市役所に貼られ、屋久島を訪れる人が増え始めた。

1990 年には、年間約 1 万人が縄文杉を見るため登山していたという。多くのハイカーが木の根の周りをよじ登ることによって起こる浸食を最小限に抑えるため、1996 年には最初の展望台が建設された。2008 年には、縄文杉に向かう人の数は年間 9 万人以上になった。

縄文杉には、ツツジやシャクナゲ、シキミ、ナナカマド、他の杉の木など 10 種類以上の着生植物(岩肌や他の植物の上で育つ植物)が生育している。2005 年、大雪の重みで縄文杉の長さ 5 メートル、重さ 1.2 トンの枝が一本倒れ、ヘリコプターで取り除かれた。その枝は現在、屋久杉自然館に展示されている。屋久杉自然館の見学者は、島の自然遺産の一部であるその枝に触れることができる。